へ13
3139
1

へ13
3139
巻 1
へ13
3139
1-5

古今奇談後編

野史話

浪華書林　稱觥堂
揚芳堂

市谷右内町
田町藤吉郎
昭和九年
九月十二日
購求

近頃の者三十年前の國字小説數十種を戯作して茶話の代四千里浦より年々に統て。美濃紙九種を搨て書林に授くるは。世重宝早なりぬ。其この作者多くは花柳者なるべし。市小説生。山下博みゝを賣り。宮戸瑞蓮き。春濤亭遠ふる為し。去年美濃浪華に遇る。書林予に縁て雑稿を求む。り去點して諸本ふ其年あり。今年おのゝ珍玩を寄せる筐の中より。冊子をとり巻。所の魚を拂ひ喫へ

として。を様基を思れ。同流を取て。沈思する
而ものの。そのを尊へるゞめ一家。求り取り
一家を新る。其首なるこゆゝのたちのる俳ハ。是
をこそ一方まん屋の賦也号ゞ屋ゝ。守屋
乃連ゝ言の意に意ゝ。屋乃理ゝ
よく展ゝり。東弓の故事一万位代の
伝奇を整ゝ。新趣人を泡すゝを
覚ゝ。白業乃巻ハ名精柄嶺の嘉題を
偽り。占ドの前数ゝ国子を従ゝ。女教
の名実全ゝとを大ゞまゝ。唐和の

猶を霞散の思を思し。生月ゝ偶言
に雷ゝ表意ゝ断る。白の紹
孫ゝ杜十姫を新ゝ。伝ゝ乃偏性をか
たり。ゝ第の戒とゝ
津宮の我異ハ軍機の乃失題ゝ。面
紀の孤ゝ昔地浦ゝ中。彼を九極。俳ハ
長体ゝりといゝ。早伝陸深名匿山川。古
老の伝吟。土人乃口碑。此ハ世ハ少四
ゝ紀を。是ゝ演義ゝして。長ゝ日の無ハ
伝ハ。実ゝ爺の名より出る新ゝ

ずと云ふ事なれども。彼をるべきを晴よ
月ばかりよ。魚の心よりして。毎夜の枝葉をば
ちぎり取る。伝をば。ぞと言ふ。他者は
月殿ばかりを大事の御ぬしなり。先づ自分な
らんかし。僕ふ思ふ。新の好あ
きば。其ひとこと。接せられを可して。一
話を類する事。已に面かゝざるの業なるべし。
ゆゑに酉の年十干閑主人撰

大逸
吾民

古今奇譚繁野話惣目録

近路行者著
子里治子正

第一篇

雲魂雷情を告て太平紙誓ふ話
寺屋に孤生式草蓉を引話

第三篇
紀の関守が霊弓一旦白多と化する話
第四篇
中津川入道山伏塚を築しむる話
第五篇
白菊の方猿掛の岸より怪骨を射る話
第六篇
素卿宦人二児と唐紅を携る話
第七篇
屋月三郎菊舎龍宮より流れ来る話
第八篇
江口の遊女薄情怨恨て珠玉を流る話
第九篇
宇佐美三津之遊紅を飾て歌を乗る話

以上九篇

古今奇談繁野話巻一巻

一雲竜雲情を語て久しきを誓ふ話

雲を體とし水を心として平生消しはてゝ棹てのみ世塵に染る事なく祖師の法蹟飛鉢の遺地跡しめ門の身中ぞ只恐らくは法はしきを祖師の法紀ぐて精進の助もなさんとこひしろ沙門ぞ手此経ちて和尚の法紀まよ繁りくゆりしぞ天永の初乃春所や霞と共に出て秋風と冷る期とし。嶮路よあゆみ雲を眺望して富士の麓に過ぎながら西うしに日は登除の志ゆゑぞうしぞ。手經める方へ伺ひもとひゆりて石ゆく もおかし。徒なる路の曉皆は空ゆとこ雲の容のと見ふ新しく知深て胡 多川雲と花法を生ぐ。夕なる雲のあしたゆくもぞ水はもろひとと此 寺の伽倍と和音ありて數日の旁を係め一夜此寺の深層の五層 よゆもて。伴像の上に坐をあい恐まとなれ紀ゆもあ。仰ぐも人の除むなき

為の楼窓なくば隠べき為の様よてそと。秋涼の通夜讀誦志けるよ
かぎかりなるなれバ世とみぞりしらぬ地し。雲路逆きさるがゆへの人
ひとけやなれなし。上絃の月中そらに高くなど雨気ありて昭暮し朧
なり。社司よそこみそとなくらんまゝ手に月のをもしん高津の宮さへさ
だかならざれば、奥ぶ揚ひ眠を催し塔の頂よ物越して琉や係遥法
陽の命と分ちてより四方に位してくあかしよ直く望むがうも南
よりハ直小よ紛の雲路稀に。小よりの雲路へ中小して絶ぢちなり。わきそ
九りハ海色よ往て。南よ出まバ海気よ消され紛なり。まりふも
右旋た旋の風よ吹ちぞらされ。じ雲氷の国あるよりて。衆雲と共よ
一片づゝてもこゝに停ことをぬるり。世の中よ雲ゐなく涼あるらき
へざりしよ落雲村雲と示くまゝん。へるものてござかさよ我を丹波
左卿と称ゆ少よ立奇游中まもかさみてえゆるが中へ看て数里の楼

臺を継さて変化定まり。無中人乾達馬猫まもたゝへて蜃楼に顕せア
すゝみも底の心ハ甚嫌あらんし。ただ高き風かよとおりてと東西よるび
くそいんせんぞ玄夜のそられ雨気を常する村雲林をよもそ
飛ら北雲ぞぐ。ハ破吹きるさなる山畑などの逆き風に吹まさされ
て。小より西より南より東へゆくハ我図難よあらざれ我そらハ遥よ
遠く吹風さへ同じかくれぞそれぞをを京らに次郎と又へ東よ云ふ数
聚らく奇游の體を招うと出へども。腰かなそ紀中へ右京も及ぎ
ざるなり。但なしび立て丈夫の如て鉄雲のをとくなりや佐ろまと
を泉の小次郎とよぶハ南の楼臺遠くして人理なきよりあたくてさ
ゆへなり。名小海風よ障ら孫て立を梯よ。奇峰のただ角ひ独出
なるゆへ世の人泉の小次郎が妻をあふらし遊ぶよ集まてうるとぞ情
の身よ引たくらべてかゝるもゆへあるかな。ご方ハ同し白峰姓なれ

遠に別てかくるゆあるてかし。扨てもけぐ〳〵と魔郎がとう名付しいたる名
浦〳〵の住人あるじ。元より素性名分まで。後は六甲のたゝまさ
ひろ首は名よ魔郎多〳〵部の山路よりひろう。東西なぐ蒙言もも
機の人浪死の人目よりたまをぐちよりこんゆゆ墨きとてのたゝろだし。
返聖よ薫ぜ〳〵もとて雲の色よ金〳〵ぐ紙生ぐ。鈴をのよびまもあづぬ
逸を說し時よりて浪死人いでろんと我ゆこいあくゆかろう。所く
しもぶ雲我ろ人を怒てあんべ我六甲の高きを侍ろ〳〵卑くろう
ろ死て彼を南海よ出ろあ。我は山よ拵てこどゆず。在間三郎出ろとゆを
にかくろ亟かれども雨師の小將なろう。ゆよ遅遅は國雲よろて長ろれ
ども。我軍の時はいづくも同じくて四つくは人世の紙ろ死なろんかろ
わかゆ。且は雲水のろ我もなぐさまのろゆおのもくがゆて紙一言で
しそもかろてせあそ仏まそろん。家もろんべ長てもよかんのは我家

なり紙。德竟鳥より厚しとろ人の饗られをゆい出ろ時ゆは差
かゆさ汗のろ紙をかん。天の戸あきて朝よ霞は黑をて我日の出の
所をかるなりゆづろ紙さ〳〵てう春雲靄よ紙を飛ひ。紙宿ろて岫
を出ろれるあゆ。曉のもぐ紙山かづ〳〵とみかゆ〳〵いて受来は。されど
ろ人の月も好景あるん。西小の嶺よ衣きせて単ろんども紙
人の見紙侵し。東小れ隈よ涼く聚まべ雨と紙ろん。ろ六甲と紙
まだ日和ろまろん〳〵。海上よ陰て漁利を宮を。城ゆ小人東人な
ゆづて遠方のあよ無し。攝の空よ陰晴。夏の日小方の雲屋ざんべ
東南の山よ拵て急雨を紙ろ。凝のもは去ろ林のあ川さとろ〳〵ひゆづて
衆生の仏いさめども。黑雲紙上よ晴く〳〵ては拵紅の樽を回ろ〳〵ひ紙やゆ
のろ人ろ日霧べ降ろも只惰かゆ。林の六中の陰き拵よ一ひゆ
ろ。風のまた〳〵月かゆべ月をてなすとろ人。雨ろもろんて陰

まうでゝ府の極要人の新邸に入て詩客の宿題歌人の擬作空しく腹中に枯しめ、暗々なるうゝて月に無の字を流しもるあを眺ふく夢西と風に驅もて往来に惜絮はゝ身の我に向ざれば書らるきを早風に吹紙帽障いそぐらんと。人もてゝ。行雲よりも月の行やなるもうさに雲の集る雲を霜とて日のをゝ赤きを旅と。紙に混じて分別なし。我等は地黄氏の新族に問ふを。地上に人より我に所なる紙世の諸人は大空の一属のやうに思ふまゝど。其系圖大に遠ひて。大空氏は其德を学みて久しく蒼天昊天昊天上天と四季の名かまゝどもみどりの色かまゝど。其飛深くして限まをえせず。我らは地より八千と量らるとも。雨空なれば雲なれば雲の形を人ちゝど。風は形なれども吹行て吹ゝて。我は一日の間に清負空まゝず。一向日のたゝぬきに照て日本晴とやらんゝ時は一黨を

な潮の低を浮て長若界に浮ぶ。古人の雲を賦したる様に。その日いさををみ。夏の日は暑氏かんとは雲ありも我をあげかゝれ。我造物の世の助ともなるは雨而已なり。是も其土地雨を慈ぶ時ゝ雲なれば行てゝ。ざれば行てあるべ。或は他方のあのあふ行雲をそそしけ方の天を紙トふ人は雲情紙取遠るゝ。時あるは水とあふ塩海潮水の分らるけまゝど。地氣を去ては我雲中の秘事なり。乾水泛て起る眞龍即ち風雲の氣屬かれば雲かれみるあを奇水と名づく。多く是遠方の龍雨なり。春の霜氣乃空に落ふるゝ夏に向て溶け落る。冬は傍ゝ雲となりて。紙雲となりて。蒼蒼しきといんせんゆるやうるゝ所は紫のごく德のごくるの距のあくさかりくるあり。只世下の人は只雲とのれども。遠き空を横ぎりて行ゝ。一筋く其脚をあゝ。飛は風水にゝども。現れ消人聚て数

ゑこゝハ陰陽の布ふ故なり。風の力ゑ乃界とある所ハ吹のこされそもく
一疋の練と引。又織姫のそゝを廣く水波さの文とかきハ。風の中そゝに
なびくなり。霰をあのわ雪ゑちりしてハ。山のそが〻ゑ風中ゝ入せし
む。左ゝ旋て紙の紙ひくがゝらなるハ天氣の去なりあるさの雲少く
紙ゝなるさの雲南を指ハ。風うもんゝて其あゝ〻ぐれなりなり。上なる雲
東に紙下なる雲西ゝむゝハ。風上下にめぐり聊雨氣の動くなり。空
より吹おろす風は其地勢ゝよりて吹もどるゝあり。清ゑの朔いるなぞ
なる風吹て出私を送り。時ふ秦風ふ帆をへゝしむ。天狗の大津ゑ奚ゝ輻
湊の擾地なりなり。風の勢ハ四方の山形ゝ因ゞゆゝ土地ゝ隨て異なり。
唐土の書ゝ名称多ゝしゝとゝも。方角と四時ふ合せられでい邦ゝ用
ゆゝ〻ぬ南の風を黄雀風ゝゝとゝも時六月ゝあゝざればゝゝべゝゝざる
ゆゝし。本朝ゑゝの俗称多ゝれも正ゝかゝゝ。若ゝ花の風とあるを

とゝハ心風吹ゑ故なゝし。水氣すゑでも吹ゝゝふるゝこの風ゝもいふゝ。
小風ゝ風ゝゝも吹あゝその横ぎりゝる遠く来りてもいふゝ。直風ゝ西
南の山なゝさ向ゝ海ゝも吹おゝゝゝゑ来ゝ一字ゝ吹送る其ゝゝがゝ清ゝゝ
涼し。風雲の紙ハ四方ゝゝゝ志正ゝゝ斜ゝゝふ隈ゝゝけて吹ゆゝ山風
は嫌なり。四方ゝゝ吹風紙隠風ゝゝゝ名ゝけ吹ゝゝれハ雲の山さゝ人ゝゝ
うゝゝぶゝ。哀や雲雨風煙ハ西ゝも忘ゝれゝ風ゝゝもゝ雲ゝれ形
勢ゝを忘ゝゝゝ紙ゝ白粉を落ゝして吹ゝゝるゝれ形ゝゝ
を吹雲ゝゝゝ名ゝけ。細ゝ忘ゝゝゝ欲ゝゝ羅章の伝ゝ山ゝ合ゝゝ
西の雲ゝれ登蹄ゝゝゝ八雲翁ゝゝ人世ゝ伝ゝゝゝ。我ゝゝゝ
ゝゝ忘ゝ雲ゝ人ゝゝ叫ゝゝゝ。百ゝゝの後ゝゝ末の雲ゝを吐
ゝゝかゝる雲ゝ。百ゝゝの後ゝゝ末の雲ゝを吐
氣ゝふれゝ引ゝ立て福利海ゝ満ち人文林をゝし。浪ゝき東風ゝ

ふく。我らが深雲し端神をひらくべし。学ぶ四方に立てそひてたへど亦峰に出し。静かなる世の観よりする人厭時を忘れることなきと雖のめに澎こくして四方ふるまと去まもう。沙門爰さめてたへに雲水の色と我を拭ひあで。此妙なる服装の荘厳なるべし。妖しくも雲魂の詩を国て人もかう問てし漢の四方に隷る雲の昔より各其名あることを初て紀まれたもあと爰ふ白雲と遊び空なる妄言聴人も妄聴をむりん。恩も角にも去をそなる

(二) 守屋の臣殘せを草莽に引話

敏達天皇の御代疫疾大に流行し。蒼生を害をるこがなのばし時物部の守屋の臣。大連の職に在て諫紀まと言聴まと。大に感名あり。固く言を進めて曰。凡善教の世界に紀ふやい国の善教へ其国に往き彼国の君教心国に寄るへ。貨を交易をるがごとく。互ふれ用いて恥なしとへ。

地を易ているべき事あり。紀まざる風あり。我国上古より空に祝れ祝楽あるに新羅百済王化に帰てより。漢土の伎楽書に伝人に伝りて。堯舜紀ひれる述ふのを其備を用ひる。祝ぐも礼楽へ世代より愛ぜざるをはど。文武周公後生ども時空に接ふ。況や今国風土習俗の異なる異ひ用ぐ。近年仏国の教伝来して敬信をるあ多し。其国遠に隔て西夷にあり。へまど其土風の若亦を考ず。先朝ありて中臣の鎌子。愚文なる尾輿等。疫疾の事より奏して奏しをり本朝えより百八十れ社稷の祀ありて祭るれてくべ天下平なり。祝れ久こあり夷神を用むに。彼仏へ夷狄の法施をぬて世法に験る。其ら実あるべ。叔滅をとめて生成を収ぐべ。漢土の上古へ君位皆長寿に して百余年に。仏は其地に入て年代むも保る。漢土に仏へざるの前へ詩書雅頌の音あって万民自ら多福なり。我日本に儒教事ざるへ前

○英雄開後編卷之一

○英雄開後編卷之一

い人の量浅く寿のみじかきなり。今夷國の神を信じ本國の神を捨
んじるゆゑ國神怒りて疫疾を流行し。朝廷より祭祀を
時の弊を救ふの激論なりしかども。今日其言を用ひ佛を去りぞけ國
清神に謝し玉ひ。万民安きにむかひ宸襟楽しみ給べきとぞ申りける。
時に馬子大臣。蘇我に豊日王の長子厩戸王子。幼年なれども聰明
人に秀でたまふ。をんで守屋に對て云。天連の言葉を用ゆべきといふ
ぞ。古昔も佛は夷狄の法用ゆべからざるいまだ法を考へざる
に似たり。我邦上古西より遷て東し。神武皇西鄙より起て宇内を併
漢土舜王なるの諸馮に生れ東夷の人文王は岐周西夷の人なるを
ぶ。皆法代佛土に後世に生れたり。佛は浄飯國王の子。其國漢土に遠う。
漢土と我邦とは南北世界の中國にあり。大に隔りの外に分
別をべからず。況に漢若に於て佛教なくして方

民を教へるべきなり。又佛は実なれるなるやいなや。其法は法を
の其教を達せざるの所に其実を求とあるべし。佛は其富貴を捨
乏身をなれ。患難飢寒を免まんがためにあらず。佛の國ありて
空虫不実の事を說く。世のれまを不実のみをうやまひ
て衆人惑て足を棄ず識の賢者其妄を知ざるんや。其乏妄なるべし教
何ぞ漢土我國の今日にいたるまで天神鬼神を傾ることなしんぞ妄な
きまでも佛の妄の證をべきなりしかるに不色の論をして愚者の
を而。其人なるを虚実れ體をたんぬ。世の人我に実なる我情の意あるに
大智にあらざるべし。ぞ乏にあらざる。其憎愛をして取捨せば。後世必れ互に相排
斥して勢二つに分れ立どとなし。佛家は儒を悪人とし。儒は佛
家と女人とし。互に品せば儒は史を記さば
佛人を引ど互に温柔の和を失ふ。又佛教入て命教を侵とい

忍澂の說によれば書の無逸より立てゝ時より願後亦克壽きと
とかゝるし。式八十年式八七八年式五六年とあり。彼時は漢土
いまゝ佛の名をも聞ざるのみにて後の。佛徒の中にて壽ありしの
あるをや。漢土ハ佛語入りて後ハ言語集雜ゆゑ頌誦淺とゝなし
もあるべし。其國に通ぜるハ音移り語雜るゝ自然にて免
ざる所なり。佛語入りて万民福なりとゝなハ後るのみを云ゝざ
あるゆゑに。早く聞あれハ早く謝し。宗を立るゆゑ衰とゝる
しみ。此祿多くして血脈續ぬあれハ眷屬より富て養ふ者あり。
煙を分つ者多きは身ふくをとてあゝいざるの後なり。世人是
を知ゝざれば貧より起る。其ハ世間にて如無學にあゝどんび利益よ
あゝどとゝなる。王者の民ハ森の如くにして惠のうられ生活と。
佛の利とる所其域より近かりん。大連熟再思と加へ給へ今法王

教既に亡るとゝへども。二帝の代ハ親切なゝざる式猶ほ。尼
直に漢土より使を遣し。面接口傳して我國を利せんと思ひて
やはり。大連の高明ゝ云ゝ。大連ハ温和なゝ從
害なゝ合て。聰明の論ゝ多ゝ不世の惑を用ゆゝ佛法を高
つて詳なる論ゝに及ぶ。良ゝ異見ハ以廣まり文華ゝ盛りて後
朴の國風を失ふて式ゝ。王子ハ大ゝ。
餘ハ多言に及ぶとゝ。帝元より佛を好まず守屋ゝ一言と取
とゝて。佛教を停め佛像を流し。僧侶を禁ぜる。ゝ疫病
くさうんべ佛を流ゝの崇ゝ為ゝ人多ゝ。豐日王嗣て
立ゝ用明帝なり。既ゝ皇子時を以て威名あり。守屋の代ゝ權
勢稍移ゝ。用明崩ゝて守屋れ皇子を位に立
と計ゝ。穴穂部皇子威勢を彰んて怒まゝ。物部飛を殯宮に

として七度門より忍ひ入り衆人屬せず馬を遂に内命を人合で
宛徳と害し。諸皇子と謀て守屋が河内の家を圍む。守屋養
屬家人と卒て稲城を築て戦ひ。三廻敵軍を却還しむ。廐戸王子
軍を率て戦を力む。守屋の軍此に利あらず。一族従者多く恩のあふぐ。
其身も矢に中て徒動作自在ならざる。合軍に告て速に逃て身を
脱ぶべし。我いまし命とて多んとつ。衆の漆部の巨坂張て守屋が
服を場て死に代らんとをひ。弟小坂を人を諫て脱れむ。守屋数
軍と同じく皂衣に服を換へ駿猟なるを伺て城を離れ廣
瀬の河に入て足ようかのごとなり。のがれ難し。守屋主従只三人。
昼は葦原に隠れ伏し。夜は星を仰て伊勢路をめぐりて淀海に入
る。我家地に年ごろ仕へたる邑の長に頼て彼が宅の後
に入て岩窟ふひそみ隠れ。創を養ひ全きことを待て代の移

る。紀さ函ともろんと命を存へ山に嶺ゆ人れ通ひ者る
踏なく。秋のこはらさぐりる中に庵引むとびて高名を草葉に
埋む。世人是を知のなし。是で張中れ張者。自ら森生家と称し此
所に老矣を翻とゆつしらるる拙古帝にうりて。廐戸皇子の嗣の
たるとして政を扶ひ。仲法時代切て真り。大利を建立し。位を
武就と。仕を唐に学し。隋唐の式に従て冠服を制し位陛を定め。徳を
肇免樂を正し。國に疾疫なく五穀豊熟し。海内の治安永代に称う。
小坂は里に出て世の動作を学て時の者る。守屋学て一度に憤王さ
びい表で玄廐戸政を関て君安く民和楽せば我に如かず。他謀
作出て遠く新に立て民間に立て実に民人の澤を被る。仏教
て國安きを。窺て我に学せ。小坂憔悴せる形に弊垢づ衣
衣とけ。乞食して大れ新に往と。里遠くして行に飢ら

英州侯帝後編　巻之一

に宮番に犯されし片岡なるものとうやく脇ようの。そなひ所は興孝ふ
去て經營をつるゞるなるに徴紀して和とかりしは不法にて長と
又のひ。たんに顧て彼ふ衣食成場へべしと命ぜ。從つる家人飢人の
傍に来て曰て云。飢人上の恵と。拾改て衣食成場へ既に村の
出に命ぜり。今もつるべしとて。飢人後て起ぜして云。後者飢て自力
賀く抗よりて。ぶまぐ拾あつるの食成をつずしてけつて仕おうぶ。
今得ぐ。さ出恵なれども。大公目系一人の飢宅をつて衣食成物。
天下の飢人いくばくありとも。ぐくて仕に衣食を給ふ成得べ
きや。是近きに親しく遠き疎く。公とと欠もふにあるべきや。家人不真
して言へどもとるいちゆつ。ありて其概をりしたに奇特のこといたりて
涙雨をトしむりて。飢人受け。其こる成先にとるい人情の常く。
況や執政一人のふい億万人のひなるをや。我に近き飢人と恵む心

ゆまとび遠き國の母に其広なるうんや。飢人地に倒して異を伏をや。
に宮に後らせもひて。美やひ飢人れ者のものふあるべ。ぶを飢に
繋まんて傷べしとるに咏ぶ

乞なでゆるや片岡山に飢に如せる其人哀をや成し

人をてこなをめるまく。邑長をぞて衣食成あるべて飢人せる人
つるるゞぶく。家人をるの涙咏をのりて仁徳を施を。飢人世に者
ぶき体にて友人に對しそのくとなん

するゞや民の小川はたへどこて我大君のみそないをれど

使傷て此に啓をされでこそ異人なりこと。家わて人をして飢を
ちるるてよ使るるが飢る衣を其地にとめて其人い紀もなーぶやて
小坂は出雲の題まんてこ成恐まと其和をのゞ行こう。境をたぶて遠
遥ぶに歩こ成れなれば。色四の彩るゆに立てて及れ傍に脳

と所ゝ乞食なく死れ新仕をる人来り。群ゝる漁人の教をかぞへて食をあゝ人ゝ所ゝ漁人とゝこゝ衣をあゝ人。係逐ゝ起ぞんべ。とゝ人の具とねさせん。公安ゝ乞てゝ去る。流乞丐多面く相対し語てゝ。彼れ日掾政王片岡ゝて飢人を恵ゝ物のこ。諸有司ゝゝ共つゝへて。大饗の料を減じて。今日より所る恵をけ法せゝゝ。貴紙さよとゝ所る。小坂是ゝより逐ゝ海ゝ流ゝ。義に対ゝて去るの仁恵とゝる。紀教森ゝて云。掾政王仁い国を紀ゝ恵ゝ死骨ゝ及ぶ。民永ゝ恩徳をうけん。我収び去ゝれ加ゝ。我今日国の金銭ゝ乞ゝ甚後い敵ゝ世上のゝを回ゝ。後廐戸王薨ぜゝるゝ共て傷ゝ嗟て止ゝ。ゝを徒ゝい里民ゝ仕来し。彼ゝ教て水銭放ち土を穿き利益をゝるゝ少ゝ。諸人里ゝ出ゝ。山中老境ゝ廐ぜゝゝ。ゝ共ゝ百歳の長寿を保ち。皇極の朔ゝ廐戸乃

所ゝ山背王。入鹿ゝ為に亡ゝ社其嗣を絶ゝ共て孤ゝて云。此人のゝゝしゝ。ゝ人ぞ。ゝる。教雲早く散ゝ天ゝ。ゝ坂云此世の人見ゝ為ゝ記あり。ゝゝ須ゝ墓地を名ゝ。其ゝ旁の地脈を断て收ゝ。ゝ孫ゝ。ゝ恵て朝ゝ。ゝ志願なるゝ。義聴て笑て云。葬地の吉凶ゝ孫れ盛衰を論ゝ。堪輿流弊風水家れ説ゝて人を惑ゝ。其害大なり。我国其事の行ゝ。ゝて一つの家ゝ。ゝ墓を築ゝる身ゝて。其墓を守ゝ。ゝ孫の禍を死ゝや。是ゝ仏を信ゝ世ゝ功ゝて其ゝ孫續ゝ。伝法福ゝ。愚人の殺ゝて代恐ゝ。傍家ゝ記を妄作流言ゝて。其ゝ掩ゝ。家運ゝ大教の定ゝ。夏殷周の三代も時ゝ。ゝ人勢ゝ。ゝ豈久ゝ。ゝ果ゝ。ゝ為ゝ馬ゝ三代の聖業。入鹿ゝ。ゝ遂ゝ。義世代変

易とこつくし。時代遠ふ後まて。今ハ怪石不ふ[illegible]里人よ告て云。我ハ光明の大連和部守屋の化。世代のゝれ此地に住居して今ハ[illegible]くる。我を此地に祭らば。国土水旱の憂なく。安寧永久なると湖水の[illegible]ざるべくしと。遠祇ようて遁去後小祠を建て萩原神と祀なり。祭祀おこたらば。大連の一族くる叢窟も。今よ伝説して遠ひらとかくり侍へくると云る

方正道人凝戸主守屋の化と詠永をる詩あり

雪裡拝一條順克柔　石梁度人斷一時休
臨レ史何一取口碑實　紅白就一分荻與レ萩

古今奇談繁野話巻第一巻終

服部氏